



鼻専用の内視鏡を使って鼻腔の状態を観察する鴻医師。モニターに映った画像を患者自身も確認できる

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く!
 ニッポンの医療現場 第29回

なじみやすい病名がひとり歩き 花粉症?! 症状が長引いたら 一度鼻の中をのぞいてもらおう

毎年、この季節になると鼻がムズムズする人も多いのではないだろうか。そのほとんどは「花粉症」と呼ばれるスギ花粉などによるアレルギー性鼻炎に違いないが、たまに花粉とは別に原因があったり、鼻の病気で花粉症が重症化したたりする例もあり、要注意だ。

「鼻中隔彎曲症」が頭痛の原因に!

環境省の報告によると、スギ花粉の飛散は冬の低温の影響を受け、例年より遅く、また飛散量も少ないと予測されている。国民の16%が罹患していることから「国民病」とも呼ばれる花粉症だが、「あくまでもアレルギー性鼻炎の一つであり、鼻がムズムズするからといって、自分は花粉症」と決めつけるのはよくありません。思わぬ病気が隠れていることもあるのです。

と話すのは東京慈恵会医科大学病院耳鼻咽喉科准教授の鴻信義医師。最近、診察した30代の男性、Aさんの例を挙げる。

Aさんが鴻医師のもとを訪ねたのは今年1月。スギ花粉症のため、長年、飲み薬と市販の点鼻薬に頼っていたが、気がついたら1年中、鼻をかむようになっていた。痰も絡み、鼻づまりと頭痛が絶えず、睡眠不足にもなっていた。

鴻医師がAさんの鼻の穴(鼻腔)を鼻鏡という専門

睡眠不足や食欲不振などにもつながり、QOL(クオリティ・オブ・ライフ)生活の質)を低下させる。さらに、鼻水がのどのほうに落ちてくる後鼻漏が続くと、気管支炎や喘息などをもちやすくなる危険性もある。鼻の病気が軽視できない。

「とくに慢性化して徐々に症状が悪くなると、本人が気づかないうちに、QOLが下がっていることがあります。巷で鼻をすすったり、痰を吐き出したりする方をときどき見かけますが、そういう方は、一度、耳鼻咽喉科で正確な診断と治療を受けたほうがいいと思います」(鴻医師)

花粉症は市販薬、マスクなどの関連グッズと、市場が大きい。病院で診てもらわず、不要なものを買って、メーカーの戦略に踊らされている可能性もある。自己判断せず、原因をきちんと見極めて正しい対処や治療をすることが重要だ。とくに花粉症が長引いていたら、一度は耳鼻咽喉科を受診してほしい。



鼻中隔彎曲症と診断されたAさんのCT画像。鼻中隔(中心付近のグレーの部分)が曲がっていることがよくわかる

Aさんの場合、ベースにある病気がスギ花粉症も含めたアレルギー性鼻炎でしたが、鼻中隔彎曲症があることによつて症状が重くなっていると考えられました」(鴻医師)

さらに、花粉症が重いつつ来院する患者のなかには、市販の点鼻薬を過度に使用したことによる「点鼻薬性鼻炎」を起しているケースも多いそうだ。

使い始めるとやめられない 点鼻薬性鼻炎の可能性も

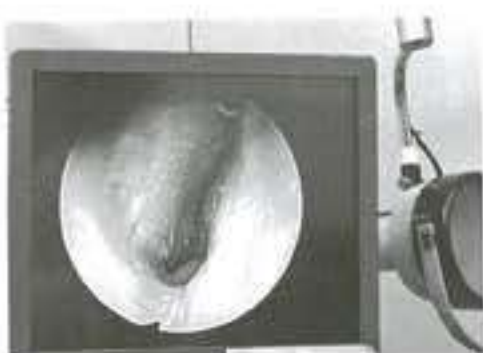
実は、市販薬と一部の処方薬の点鼻薬には、血管収縮成分が入っている。使うと血管が収縮するため、むくみが取れ、一時的に鼻の通りがよくなるが、効果が切れるとリバウンドによつて血管が一気に拡張、使用前より鼻がつまってしまう。「点鼻薬の怖さは、一度使い始めるとやめられなくなるところにあります。本来なら1日1回の使用が、1日数回にも増えているようなら、点鼻薬性鼻炎が疑われます」(鴻医師)

このような問題が起こる背景には「花粉症」という病名の親しみやすさもあるのではと、鴻医師は話す。「名前にあまり重症感がないため、病院にかからず自己判断しやすいのかもしれない」(鴻医師)

そのため市販薬で済ませたいのだが、症状に合った薬を飲まず無駄な治療を続けたり、薬によつてかえって症状が悪化したりするケースも意外ある。花粉症かもしれないと思つたら、やはり耳鼻咽喉科で診てもらふことが大切だ。

耳鼻咽喉科がアレルギー科や内科と違うのは、「鼻腔をのぞく」ところだ。アレルギー科などでは、血液検査や皮内テスト(アレルギーの原因を探る)が実施されるが、鼻をじかに診察することはあまりない。

「耳鼻咽喉科では、鼻腔の形や鼻中隔の曲がり具合、鼻汁が水っぽいのか、黄色いのか、粘膜はむくんでいるのか、赤く腫れているかといったことを細かく観察します。鼻汁の状態から副鼻腔炎などほかの鼻の病気が見つかった例もあります」(鴻医師)



今回、診察を体験した読者の鼻腔。右に比べて左の鼻腔が細く、腫れていることが内視鏡で明らかになった